

君を愛するために

目次

君を愛するために

5

番外編 ふしだらな溺愛

261

君を愛するために

「今日も疲れたなあ」

仕事を終えた日立星南は、重い足取りで街中を歩いていた。オフィスビルが続く道を抜けると、すぐに都会の華やかな雰囲気広がる。

勤め始めた頃は、会社帰りにショッピングができるし、欲しいものもすぐに手に入って便利だと思っていた。しかし今では、疲れた身体を余計に疲れさせる人混みにげんがりしてしまう。

そんな星南の疲れた気持ちを癒してくれるのは、たった一人の素敵な人だ。

毎日、会社の行き帰りに見る、お洒落な男の人の看板。

海外ブランドながら値段が手頃で、若者に人気のファッションブランドだ。とは言え、やはりそれなりのお値段はする。なので、星南は小物くらいしか購入したことがなかった。

看板に写る男性モデルは、ブルーのスーツにグレーのベストを合わせ、自然なポーズをとっている。

彼は知らない人がいないほどの有名人——音成悦思だ。

「今日もカッコイイ、悦思！」

星南は看板の前で足を止め、そこに写る彼の顔をじっと見つめる。

すると、彼女の耳に軽快な音楽が聞こえてきた。

ハツとして振り向くと、背後に建つ大きなビルのスクリーンいっぱい看板と同じ彼の姿が映し出される。

ファンの間でもかなり評判がいい音楽メディアのCMだ。ドクンという大きな鼓動と共に目覚めた彼が、溢れる音楽の中で踊っている。彼の日本人離れした外見と印象的な映像がマッチした非常に目を引くCMだった。

そのCMが画面に映し出された途端、道行く人たちが足を止めてスクリーンを見上げる。中には、口元に手を当て顔を赤くしている女性もいた。スタイリッシュでカッコイイそのCMに、星南も見入ってしまう。

三十秒の至福の時間が終わると、ほうっとため息をついた。

どこに行っても見ない日はない彼を、気付けばいつも目で追いかけている。

星南は再び、看板に視線を向けて微笑んだ。

「毎日カッコイイですね。仕事帰りの癒しです。あなたみたいな人が彼氏だったら素敵だろうなあ」
どんなに笑みを向けようと、看板の中の彼は微笑み返してくれないし、話しかけてもくれない。でも、思うのは自由だ。星南は愛しい思いを込めて、看板にそっとキスをした。

こんなところを誰かに見られたらかなり恥ずかしい。だけど、街行く人たちは手元のスマホに夢中で、星南を気にする人なんてまったくいなかった。

もし見られていたとしても、きつと何やってるんだ、くらいのことだろう。

星南は手を伸ばして、彼の写真の頬に触れる。

「音成怜思さん。いつも、見てます。今度の映画は、切なそうな恋愛映画ですね。音成さんの映画を観る時は、いつもヒロインと一緒に、あなたに恋してしまうんですよ？」

二十五歳で看板の写真に話しかけるなんて、我ながらヤバイ女だと思う。そろそろこういうことは卒業した方がいいかもしれないと思いつつ、彼に向かって微笑んだ。

「本当に？　ありがとう」

その時、すぐ後ろから男の人の声が聞こえた。

星南の心臓がトクンと音を立てる。

これまで何度か繰り返して聞いた、よく知った声――

振り向くと、そこには男の人が立っていた。目深まぶかに帽子を被り、黒縁眼鏡をかけた背の高い人。ゆつくりと眼鏡を取ってにこりと笑いかけてきた顔は、先ほどキスをした看板と同じだった。

「近くで見ると結構大きい看板だね、目立つなあ……」

そう言っただけで歩み寄ってきた彼は、紛れもなく音成怜思、その人だった。

「お、音成、怜思さん？」

「君は誰？　俺のファン？」

呆然としたまま頷くと、再び眼鏡をかける彼。その仕草がすごくかっこよかった。

目の前の彼は控えめながらも、お洒落しゃれな服を着ている。アンクルカットパンツに黒のスニーカー、白いTシャツに黒のジャケット。それだけ見ると街を歩く人ときほど変わらない服装だ。でも、音成怜思が着ているだけで、特別な服に見える。

その時、背後のビルのスクリーンで、再びさつきと同じ音楽メディアのCMが流れ始めた。それに気付いた彼の視線が、背後のスクリーンを見上げる。

「ああ、あれも目立つなあ……。あのCMの俺、やたらカッコつけてるよね」

スクリーンから視線を戻した彼が、笑いながら星南に尋ねてくる。

「君は、仕事帰り？」

言葉を出せずに、星南はただ頷く。

「そう、俺も。お疲れさまだね、お互い」

――超有名な彼が、なんでこんなところに？

頭の中で何度も問いかけるけれど、目の前の現実が上手うまく受け入れられない。

もし音成怜思と話ができたら、こんなことを話して、あんな質問をして、といういろいろ考えていた。それなのに、いざ目の前にしたら、あまりにもびつくりして声が出でこない。

「驚かせてごめんね。声をかけずにはいられなくて……。迷惑だった？」

何も言わずに首を横に振ると、彼は笑みを深める。

まっすぐに自分を見つめる彼の視線に、顔が熱くなってきた。

彼は、ずつとずつと好きだった雲の上の人。そんな夢にまで見た憧れの人が、目の前で自分を見つめているのだ。この状況に星南はどうしていいかわからなくなってくる。

なんだか、今すぐここから逃げ出したいくなった。

「よかった。今、とてもいい気分なんだ……それに……」

彼が何か言っているけれど、テンパった耳ではよく聞き取れない。だから星南は、じりじりと後ずさった。

その行動に対して、彼は少し怪訝な顔をする。

音成怜思にこんな顔はさせたくないのに……そんなことをぼんやり考えながら、現実逃避した。

星南はぼつと踵を返し、全力疾走でその場から逃げ出す。

「あっ！ 君、ちよつと、待って！」

背後から自分呼び止める彼の声が聞こえる。思わず止まりそうになる足を必死に動かして、星南は駅を目指した。

だって、憧れの人が目の前にいたのだ。

なのに自分ときたら……

「絶対、化粧、剥げてるよ！ 仕事帰りで疲れた顔してるし、今日の服めっちゃダサいのに！」

星南の服装は、きちんとしたオフィスカジュアルだ。でも、お洒落とは言い難い。

もし事前に、今日は彼と出会う運命だとわかっていたらなら、もつと可愛い服を着てきたのに！

せつかく本物の彼に会えたのに、後悔することばかりだ。

耳に残る音成怜思の声を反芻しながら、星南は泣きたい気持ちで走り続けるのだった。

* * *

音成怜思、三十三歳。

オックスフォード大学を二年で卒業し、イギリスでの法学学位を取得した。イギリスから帰国した二十歳の時に、羽田空港でスカウトされたというのはファンの間では有名な話。

そのままモデルとしてデビューした彼だったが、ある監督に気に入られて出演した映画が大ヒット。

素晴らしい演技力と、日本人離れした美しい外見が各分野で高い評価を得て、一躍時の人となった。

モデル兼俳優として活躍の場を広げていった彼は、やがて卓越した語学力を生かして海外の映画にも出演するようになる。その整った容姿もさることながら、持ち前の演技力で世界の人々も魅了し、いつしか世界的人気俳優と言われるようになった。

また、日本の人気俳優男性部門で三年連続一位を獲得。さらには、抱かれない男ランキングでも三年連続一位を獲得し、殿堂入りをしている。

———こんな雲の上の有名人が、まさか会社の帰り道にいて、普通に声をかけてくるなんて夢にも思わない。

「どうしたの？ 今日には元気ないのね、星南ちゃん」

隣のデスクから、先輩の矢加部エリコがそっと声をかけてきた。

「あ……いえ、何でもありません」

彼と偶然に出会った翌日。

星南は勤務する会社のデスクで、朝からひたすらデータの打ち込みをしていた。

それがいつの間にか、音成愔思のプロフィールを頭に浮かべてポーツとしていたらしい。

そろそろお昼に差しかかる時間。早めにランチを取りに行く社員がいるので、オフィスは少しずつ人気なくなっていく。

「何か悩み事？ 今日には旦那の帰りが遅いから、一緒にご飯でも食べに行く？ 私でよかったら話聞くわよ？」

星南はエリコに笑みを向け、小さく首を振る。

エリコはこの会社に入社したばかりの星南にいろいろと仕事を教えてくれた人だ。気さくで面倒見がよく、すぐに仲良くなった。デスクも隣で、何かと世話になっている。年上の同僚であるエリ

コを、星南は尊敬していた。

「大丈夫です。実は昨日、ちょっとびっくりすることがあって……それを思い出してなんです」

「そうなの？」

「はい。いつも気にかけてくれて、ありがとうございます」

星南が笑ってみせると、エリコもまた笑みを浮かべた。

「じゃあ、ただの女子会やりましょう。星南ちゃんと美味しいものが食べたいわ」

「わー、行きたいです」

「たまにはスペイン料理とかどう？」

「賛成です！」

互いにこっそり笑い合っていると、こちらを睨んでいる課長の視線に気が付いた。ヤバイ、と思つて首をすくめつつ、二人とも何事もなかったように仕事を再開する。

星南は、一般事務の仕事に就いている。データの打ち込みや資料作成など業務量はその日によって変わるが、急な残業もありそれなりに忙しい。

今日は終業後にエリコとご飯へ行くため、絶対に定時で仕事を終わらせる。そう心に決めて、星南はキーボードを打つ手を速めた。

でも、ふとしたことで昨日のことを思い出してしまう。

だってあれは、本当にびっくりしたのだ。今でも信じられなくて、何度も頭の中で反芻してし

まう。

音成怜思は、眼鏡をかけていてもカッコよかった。プライベートらしい普段着が素敵だったし、腰の位置が半端なく高かった。

というか、目の前で看板にキスとかしちゃって、気持ち悪く思われなかっただろうか。

確かに誰に見られてもおかしくない場所だったけど、まさか本人に見られるなんて思わない。

自分の行動を後悔しつつパソコンにデータを入力していたら、目の前にバサッと書類の束が置かれた。驚いて顔を上げると、ゴトリと分厚いファイルが追加される。

「日立さん、これ、プレゼン用の説明資料ね」

総合職に就いている目の前の男性は、ある意味星南の上司と言ってもいいポジションにいる。

「適当に書類入ってるけど、きちんと分類しておいてくれると助かる。これ明日の朝一の会議で使うから、今日中にまとめておいてくれるかな？」

書類の数、分厚いファイルからして、確実に残業コースだ。

これを今日中って……と思いつながら、積み上がった資料を見つめる。でも、上司から言われた仕事はやらなければならない。

「わかりました。今日中にやっておきます」

星南は、笑みを浮かべて彼を見上げた。

「ありがとう。いつも助かるよ」

そう言われると残業もしようがないと思ってしまうから、我ながら単純なものだ。でも、エリコとの食事は難しいかもしれない。

上司の後ろ姿を見送り、目の前に積み上がった資料の山にため息をついた。

すると横から、声をひそめたエリコが声をかけてくる。

「もう！ 絶対あの人、星南ちゃんなら残業になっても断らないって思ってるわよね……私も手伝うわ。ちょっと遅くなっても、一緒にご飯行きましょう！」

エリコの提案は嬉しい。けれど、星南は彼女のデスクに積まれた書類を見ながら言った。

「ありがとうございます。でも、エリコさんも、仕事詰まってますよね。この量だから、さすがに定時はムリですけど、今から頑張ればなんとか七時には終えられると思うんです。……それからご飯でも大丈夫ですか？」

エリコも、自分のデスクの仕事を見つめて苦笑した。

「そうね……じゃあ、こっちが早く終わったら手伝うわ。今のうちに、お店、予約しておきましょうね。平日だけど、その方が確実だから」

「はい。お願いします」

星南は、頭を下げた笑みを浮かべる。

エリコは軽く星南の肩を叩いて自分の仕事へ戻っていった。

「よしー！」

ぼんやり音成怜思のことを考えている暇はない。星南は気持ちを引き締めて目の前の仕事に集中した。今日の業務が終わったら、美味しいごはんを食べる。そしてまた明日からも仕事を頑張るんだ、と思いながら。

* * *

「はあー、今日は大変だったわねえ」

「まあ、いつものことですけどね」

結局仕事が終わらず、お店に入ったのは夜の七時半。エリコがお店に予約を入れておいてくれたおかげで、到着が遅れても席はちゃんと確保できていた。

ビールとカクテルで乾杯したあと、星南は仕事が終わるのを待っていてくれたエリコに頭を下げる。

「遅くなってすみませんでした」

「いいのよ。まったく、明日の朝必要な書類を前日急に頼むなんてねえ。しかもあの量！ほんと人がいいんだから、星南ちゃんは」

ぷりぷり怒っているエリコに、星南は苦笑する。それでも、誰かがやらなければならない仕事なら、仕方がないことだとも思う。

「でも、そういうところ、偉いよね。いつもごめんね、ありがとう」

「そう言っていただけで嬉しいです。でも、明日は定時に帰りますよ」

「そうね。私も定時に上がるように頑張るわ！」

エリコは力強く宣言して、お代わりのビールを頼んだ。お酒があまり強くない星南は、最初に頼んだカクテルをちびちび飲んでいる。

「そういえば、昨日あったびっくりしたことって何？ 午前中、珍しく星南ちゃん上の空だったし、気になっちゃって……」

エリコが、心配そうに顔を覗き込んできた。

「すみません……ええと、嫌なことじゃなくて、むしろ嬉しかったことというか。こう、舞い上がっちゃう、みたいな」

昨日あったことを思い出すと、気分が高揚する。びっくりしすぎて思わず逃げ出してしまったけれど、デビュー当時からカッコイイ、素敵だと思いついてきた音成怜思があんなに近くにいたのだ。

しかも、お疲れ様、と声をかけてくれた。会話らしい会話はできなかったけれど、直接聞いた彼の声はまだ耳に残っている。

「えー？ なになに？ 教えてよ！」

「これはちょっと、ダメです」

思わず顔がニヤけて、満面の笑みを浮かべてしまう。きっとお酒の効果もあるんだろうけど、舞

い上がってしまいうくらい嬉しかったことだ。どうせなら握手をしてもらえばよかったと、今は思う。「すごく、良いことだったのね？」

「はい、それはもう！ だから今日の残業もいろいろと頑張れました」

そっか、と微笑みながら言われて頷く。

もうあんな機会は二度とないだろう。東京には、ものすごくたくさんの方がいる。そんな中で出会えたのは本当に奇跡だと思った。

実際に聞いた彼の声は、テレビ画面から流れてくる声よりずっと素敵だった。モデルや俳優としての活動がメインの彼だが、実は声にも定評がある。その実力は、海外映画の吹き替えや有名アニメの声優をするくらい。もちろん星南は、彼が吹き替えをした作品のブルーレイディスクはすべて持っている。というより、彼の出演した作品はすべて持っている。

それくらい大好きな音成怜思。いつでもどこでも、彼の声を聞きたいし姿を見たい。

家に帰ったら、お気に入りのブルーレイディスクを再生しようと心に決める。

画面の中の彼は、一途に一人の女性を愛する青年だったり、冷酷な殺し屋だったり、音楽家の役で心を揺さぶる音楽を演奏したりした。

そうして様々な顔を見せてくれる彼が、ものすごく好きだ。

もう一度会いたいと思う気持ちはもちろんあるけれど――

彼は自分とは住む世界の違う人なのだ、と星南は自分に言い聞かせるのだった。

* * *

明日も仕事だというのに、店を出たのはすでに午後十時を過ぎた頃だった。遅い時間ながら、街中なのでまだたくさんの方がいる。

バス通勤のエリコと別れ、いい気分ですく星南は自然といつも道の道に向かった。エリコが行ったスペイン料理の店からも、音成怜思の看板の前を通って帰ることができる。だから、今日も動かない彼に会うつもりで、看板の前へと足を進めた。

まるでプチストーカーのような行為をしている自分に、思わず苦笑する。でも、ファンなんてみんなこんなものじゃないだろうか。

以前エリコから、音成怜思は夢の人物なんだから、ちゃんと現実の男に目を向けた方がいいと言われたことがあった。

だから、星南なりに頑張ってみようと思ったのだけれど、結局彼以外には興味を持つことができなかったから本当にダメだ。夢の中の人に本気で恋をしても、どうしようもないのに……

ため息をついた星南は、看板に写る彼を見上げる。

「……昨日、握手くらいしてもらえばよかったな」

思わずそう漏らすと、誰かに手を握られた。側に人がいるなんてまったく気付いてなかった星南

は、驚いて隣を見る。

「握手を通り越して、手を繋ぐっていうのは、どう？」

そこには、昨日と同じく帽子と眼鏡を付けた彼がいた。

直後、ドウン！ と音がして、彼のCMがビルの大画面で流れ出す。

「お、音成、怜思、さん？」

彼は笑って帽子を少し目深に被り直す。

「しー……名前はNG」

唇に人差し指を当ててそう言った彼は、星南の手を引いて歩き出した。自分の手を包む彼の手は、大きくて温かかった。

しばらく歩いて、目立たない路地に入る。彼は大通りに背を向けて帽子と眼鏡を取った。軽く整えるように手櫛で髪を掻き上げると、彼の魅力的な黒い目が正面からジッと星南を見つめる。

「さて、君は誰？ いつも、あそこで俺を見るよね」

「え？」

一瞬、何を聞かれているのかわからなかった。

「君は、見かけるたびにあの看板の前について、俺に話しかけてるでしょ？」

今、星南の目の前で、腕を組み壁に寄りかかっている彼は、確かに俳優の音成怜思、本人だった。ものすごく高い位置にあるウエストや、日本人離れた綺麗な顔は見間違えるはずがない。

「……最初は、偶然あの看板の近くを通ったんだ。その時、君を見かけた。それから何度か近くを通ったけど、そのたびに君は、写真の俺に話しかけてる。いつしか、そんな君のことが気になるようになってね」

そう言っ、壁から身を離れた彼は星南に一步近づいた。

「あの看板のブランドとの契約……本当は三ヶ月だったんだけど、君を見かけてもう三ヶ月延ばしたんだ。でも君、本物が見てるのにちっとも気が付かないから、さらに三ヶ月延ばした」

まるで自分のために契約を延ばしたと言われているように感じて、顔が赤くなる。

「昨日も、看板にキスしてたね」

さらに顔が熱くなった。

やっぱり、あれを見られていたんだ……！

しかも、「昨日も」ということは、前にもキスしていたのを見られたということだ。

星南は、あまりの恥ずかしさにうつむく。きつと顔は真っ赤になっているだろう。すると、彼の指が顎にかかり顔を上げさせられた。

「あ……あの……」

「別に怒ってないよ。こんな純粋なファンもいるんだ、って思ってた嬉しかった」

「そう、ですか？」

「うん。いい気分だった。それに、こうしてきちんと君の顔を見られて、もっと嬉しい。きつと可

愛い子だと思っていたんだ」

「えっ？」

星南に向けられる優雅な笑みは、テレビでよく見る彼の笑顔とは少し違っていた。けれど、ものすごく魅力的でドキドキが止まらない。

「片思いつてさ、ある意味ストーキングと一緒に思わない？」

「ついさきほど、似たようなことを考えていた星南はドキリとする。」

「いつもの時間にいない時は、大抵、午後九時半から十時くらいにあの看板の前を通るよね。今日は誰かと飲んでた？ もしかして、彼氏？」

そんな人いないから首を振ると、彼はフツと笑った。

「だよね……彼氏がいたら、一人で帰らないはずだ」

星南は、彼の言葉を信じられない思いで聞いている。まさか、彼は本当にずっと、星南を見ていたのだろうか。

「君は、俺が好きなの？」

「え？ あの……ものすごく、ファンです」

「そう、音成怜思が好きなんだね」

にこりと笑って首を傾げる姿は、テレビで観る彼と同じようで少し違って見えた。

プライベートの彼は、割とはつきりものを言う人なんだ。

初めて知った彼の素顔を、とても新鮮に感じた。

「現実の俺は、君の理想とはちよつと違った？」

星南の表情から考えていることがわかったのだろう。うつむき加減でそう言われて、慌てて首を振った。

「……でも、今の音な……あなたも、素敵だと思います」

「そう、よかった」

目の前で柔らかく微笑んだ彼に目を奪われる。いつもは、誰か違う人に向けられているそれが、今は星南だけに向けられているのだ。

「突然で、信じられないかもしれないけど……俺、君に惹かれてみたい」

「え……はっ？」

今、彼は星南に惹かれていると言った？

ごく普通の一般人で美人でも何でもない星南が、そんなことを言われるなんて信じられなかった。彼が惹かれる要素はどこだろうと真剣に考えてしまう。自分の良いところを探そうとするけれど、ちつとも思いつかなかった。

「そんなに驚くこと？ だって、君、可愛いよ。毎日、写真の俺に向かって話しかけて頬を染める。……なんて純粋な娘なんだろうと思った」

彼は手を伸ばして、星南の髪に触れた。そのまま一房手に取り、そこへキスをする。

まるで、映画やドラマのような仕草に星南の心臓は破裂しそうなくらいドキドキした。

「ねえ、君は一体何なの？　どんな女にもこんな気持ち感じたことないのに」

音成怜思は、真面目な顔をして星南との距離を縮めてきた。そして、自然な動きで腰に手を回し、抱き寄せてくる。

「あつ、あの、ちよつと……」

芸能人の、しかもずつと憧れていた人からこんな風にされると困る。それに、もつと困るのは彼の方ではないだろうか。こんなところを写真にでも撮られたら、どうするのだろう。

「ダメ？」

「もちろんです！　こんなところを写真に撮られたら、大変じゃないですか」

意表をつかれたように一瞬動きを止めた彼は、すぐにフツと微笑んだ。

「大丈夫だよ。俺がこんなに目立つ場所で、堂々としているなんて誰も思わないから」

それはそうかもしれないけれど、とすぐく周りが気になる。この路地の先は行き止まりで、彼は通りに背を向けて立っているから、顔を見られることはないかもしれない。でも、もし星南といったことで、憧れの人が一のことがあったらと思うと、後悔してもきれない。

気になって通りに視線を向けると、頭上から声が降ってきた。

「名前、連絡先、仕事先、全部俺に教えて」

「へっ……そんな、なんで？」

予想外なことを聞かれた星南は、思わず素つ頓狂な声を出してしまう。

「俺が君を好きだから」

開いた口が塞がらないとは、まさにこのこと。

音成怜思が——ずつと憧れ続けてきた大好きな彼が、星南を好きだと言った？

「ここで教えてもらえないと、またストーキングすることになるけど、いい？」

「えっ、あの、ス、ストーキングって……」

あまりのことにどうしていいかわからず、しどろもどろになってしまう。

「早く教えて？　この間にも、誰かに気付かれるかもしれないよ」

現実の彼は、本当に物事をはつきり言っつて、そして結構オレ様な感じだ。

でも、そんな彼も嫌じゃない。

星南は急いで、バッグの中からスマホを取り出した。

「ひ、日立星南です。あの、そのビルの十階のオフィスに勤めてます」

正面に見える大きなビルを指さすと、彼はちらりと振り返った。

「わかった。それで？　連絡先は？」

彼は有無を言わず連絡先を聞いてきた。

まずはメールアドレスを交換し、次に電話番号。

「ねえ、星南ちゃん。俺、君のせいでおかしくなったみたいだ」

彼は自分の連絡先を入力したスマホを星南に返すと、熱い視線を向けてくる。

「正直、ストーキングされたことはあっても、誰かをストーキングしたのは初めてだ。それに、告白しておいて悪いけど、俺はこれまで恋愛にあまり重きを置いてこなかった」

「そう、ですか。……らしいかも、です」

息がかかるほど近くに綺麗な彼の顔があつて、星南の心臓はドキドキしすぎて今にも壊れそうだ。「ここら、そこで完結しないでよ。だからさ、そんな俺がストーキングまでして君に言い寄ってる意味、ちゃんとわかってる？」

——意味？

言われていることがよくわからなくて、ぼかんとしてしまう。

彼は人気俳優で、憧れの人だ。

そんな人が星南の目の前にいて、私のことが好きでストーキングしたと言っている。

そんなこと現実にあるわけがない。

むしろ、これは夢だと考えた方がよっぽどしっくりくる状況だった。

でも直接耳に届く低くて綺麗な声と、星南の腰を支える手のひらの熱さは本物で……

それに、どこか困ったような、なんとも言えない表情をしている彼は、夢にしてはやけにリアルだ。

「まあ、今日はいいか。ねえ、明日も仕事？」

「は、は」

「仕事が終わる頃に連絡するから、絶対に電話に出て。わかった？」

そう言いながら腕時計を見る。その時計には星南でも知っているくらい有名なブランドのマークがついていた。

「は」

「残念ながら、タイムリミットだ。じゃあまた。今日は、強引に迫ってごめんね、星南ちゃん。送れなくて悪いけど、気を付けて帰るんだよ？　ここを右に曲がってまっすぐ行ったら、駅に着くから」

そう言っただけで、自然な動きで星南の額にキスをした。

ゆっくりと唇が離れ、彼は笑みを向けてくる。

柔らかい感触が残る額が熱い。自然と顔が赤くなっているのがわかる。そのうち耳にもそれが伝染した。ドキドキと音を立てる心臓の音が彼に聞こえてしまっただろう。

星南が固まっているうちに、彼はさっと背を向けて歩いて行ってしまっただろう。しばらく呆然と立ちつくしていた星南は、我に返った瞬間、とんでもない事態に気付く。

「音成怜思が、私のことを好きだと言った……？」

信じられない出来事が我が身に起こった。驚きのあまりぼかんと開いたままの口が塞がらない。手の中のスマホを見ると、夢ではない証拠に彼の名前がすっかりアドレスに入っている。電話番号

号もメールアドレスも登録されていた。

「信じられない、うそ……」

ふわふわした心地で星南は路地から出て、彼に言われたように右に曲がりまっすぐ歩く。

しばらくすると、駅に着いた。星南はいつも通り改札を通って電車に乗る。

しかし、あまりにもびっくりして、あまりにもポーツとしていたため、星南は降りる駅を乗り過ごしてしまったのだった。

2

次の日の朝は、いつもより早く目覚めてしまった。

そして、考える。

どうして私にあんなことが起きたのだろうか、と。

何度も何度も、心の中でつぶやいた。

少しずつ明るくなっていく部屋の中で、白い天井を見上げながら星南は下唇を噛む。

「あんな夢みたいなこと、やっぱりあるはずない」

どうにか起き上がって、スマホを見た星南は大きく目を見開いた。

『音成怜思です。星南ちゃん、今日、仕事が終わったら連絡ください。会社まで迎えに行きます。』

普通の車で迎えに行くから安心して』

「夢じゃなかった……」

メッセージの受信時刻は午前三時五分。

それを見て、もしかしたら昨夜会ったあとも、彼は仕事をしたのかもしれないと思った。

『美味しいご飯食べようね』

芸能人の言う美味しいご飯って、ものすごく美味しいに違いない。

それで、値段もものすごく高いのだろう、と、一般人の星南は推測してしまうわけで。

フワフワと浮いているような気分は、目が覚めても抜けてくれない。

星南はおもむろにベッドから立ち上がり、今日の服を真剣に考えた。これが夢でも嘘でも、彼の誘いを受けたいと思ったから。

* * *

「日立さん、会議資料のコピー二十部お願いね」

「はい」

午後一の会議で使うものだろう。資料は全部で十二枚ある。コピーして会議の机にセットするこ

とを考えると、それなりに時間がかかりそうだ。お茶の準備もしないといけない。

今頼まれている急ぎのデータの打ち込みもあるから……と、星南はこれからの仕事の段取りを考えていく。思ったより早く一日が終わりそうだった。

ひとまず星南は、データの打ち込みを後回しにし、資料を抱えてコピー機へ向かう。

資料の大ききごとにコピーの仕方を考えながら、ふと今朝のメールについて思い出した。

『今日、仕事が終わったら連絡ください。会社まで迎えに行きます』

時間が経つてくると、やっぱり夢のように感じる。

夢じゃなかったと思ってみたり、夢みたいだと思ったり。星南の気持ちは、昨日から夢と現実を行ったりきたりしているようだ。

だって、偶然見かけた女性を好きになるなんて、まるで最近見た彼のドラマみたいだ。

会社員役の怜思が、フラッと立ち寄ったカフェショップで出会った女性に惹かれていく恋愛ドラマ。互いに少しずつ惹かれていく過程が、妙にリアルでくすぐったくてドキドキした。

ストーリー自体は王道だったけど、二人の何気ないシーンにすごくほっこりしたのを覚えている。ドラマだとわかっていても、怜思の演じる彼が相手役の女性を愛する姿が真に迫っていて、思わず女優と自分を置き換えて見ていた。

それもあって、つい星南は夢と現実が混同しそうになってしまう。

「星南ちゃん……星南ちゃん！」

「は、はい!？」

星南のすぐ後ろにエリコが立っていた。驚いて振り返ると、彼女はため息をついて肩をすくめる。「コピー終わったら声かけてね。私も頼まれたものがあるから。……大丈夫？ 赤い顔でポーツとして。まるで恋する乙女みたいよ?」

ふふ、と笑顔で指摘されて、自分がしばらく上の空だったことを自覚した。

「す、すみません……ちよつと考え事をしていて……」

星南は、慌てて頭を下げた。

「もしかして……音成怜思のことでも考えてた？」

エリコは星南が熱烈な音成怜思ファンだと知っている。だからたまに雑誌の切り抜きなどを持ってきてくれたりするのだ。

「ま、まあ、そんなところです」

「そんなんじゃ、いつまでたっても現実の彼氏ができないわよ?」

エリコの言葉に、星南は苦笑を浮かべる。

「星南ちゃん可愛いんだから、ぜひともあなたに合った現実の彼氏をゲットしてほしいわ」

星南は一気に目が覚めていくのを感じた。

昨日会ったのは、ずつと憧れていた音成怜思だった。テレビで見えていたままの、目鼻立ちの整ったとても綺麗な男の人。

彼と会ったのは、確かに現実だったけど、今日の約束は夢かもしれない。

——芸能人のなりすまし、ってこともあるかもしれないし。

「うちの旦那が、会社の合コンで女の子探してるの。よかったら、星南ちゃん行かない？ 私と旦那も参加するから」

私たちにとってはただの飲み会だけど、と言って笑うエリコに、行ってみようかなと思った。

冷静に考えれば、彼は芸能人だ。星南のようなごく普通の女に、本気になってなるはずないじゃないか。それに、星南は恋愛のことなんてまったくわからない初心者なのだ。

こういうネガティブループを繰り返すくらいなら、初めから夢だと思ってなかったことにしてしまった方がいいように思う。

「そうですね……思い切って参加してみます」

「そうこなくちゃ！ じゃあ日程は、また連絡するね。あ、コピー終わったみたい。私の番ね」

星南は笑顔でコピー機に山とまっている資料を手に取り、ホチキスを持って会議室へ向かった。

「連絡したら、本当に来てくれるのかな……でも、連絡しなかったら来ないよね？」

会議室の長机に資料を並べて、一枚一枚順番に取って最後にホチキスで留める。

それを繰り返しながら大きいため息をついた。

なんで、憧れの芸能人が星南の前に現れたりしたのだろうか。

身に余る奇跡は、時に残酷だ……

そう思いながら、星南は黙々と仕事をこなしていくのだった。

* * *

すべての仕事が終わったのは、終業時間を一時間過ぎた午後六時だった。

あとからまた書類仕事を頼まれて、それをパソコンに打ち込むのに時間がかかってしまったのだ。それでも早く終わった方なので、ほっと一息つく。

会社の制服から着替えて、ロッカーの中からバッグを取った。そうしてスマホの画面を開くと、そこには音成怜思から一件のメッセージが届いていた。

『仕事が終わったら連絡して。迎えに行く。待ってるから』

今日二度目のメッセージを見て、勝手に鼓動が高鳴っていく。

異性をこんなに意識したことは、今までになかった。

本当に、どうしたらいいんだろう。

星南は恋愛初心者だ。男の人と付き合ったことがあると言っても、おままごとみたいな付き合いだけ。大人の付き合いらしいことは何もなかった。そんな自分が、本物の芸能人、それもずっと憧れていた人となって、本当に？ と思ってしまう。

心の中で、冷静な自分が浮かれた自分に言い聞かせる。

彼はテレビの中の人でアイドル、つまり偶像なのだ。

つまり、現実にはいないも同然の人――

彼が相手だと、あまりにもファンすぎて、たとえ遊びでもいいと思ってしまう自分がいる。でもそんな自分は不幸だし、何より可哀想すぎる。

だったら、彼とどうにかなるとか、付き合うとか、遊びでもいいとかいう考えを頭の中から排除して、最初から会わなければいいのだ。

このままファンでいる方がいい。

一般人の自分は、エリコの言うように合コンに参加して、現実で彼氏を見つける方が合っている。そう、言い聞かせた。

「決めた！ 返事は、しない。私は、普通、前向き、舞い上がりたくない！」

スマホをバッグの中にしまい、ロッカールームを出た。途中、会社のエントランスに映った自分を見る。今日は、自分なりにお洒落しゃれをしてきたから、結構可愛い恰好をしていると思う。

マキシ丈のスカートに、繊細なレース袖のTシャツ。足元は三センチヒールのラウンドトゥパンプスを履いてきた。本当はパンプスはあまり好きではないのだが、彼に会うのだと思ったら、少しでも綺麗に見せたかったのだ。

帰り際、エリコにデートにでも行くみたいねと言われた。

確かに今朝はそのつもりだったけど、冷静になった今はちよつと恥ずかしい。

でも、今日くらいはこんなお洒落しゃれもいだろう。また明日から、いつもの自分に戻ればいいのだ。会社を出て、星南はまっすぐ駅へと足を向ける。

すると急に後ろから腕を引っ張られて、勢いよく誰かにぶつかった。

「ああ、ごめん、力が強すぎたみたいだ。君、思ってたより軽いな」

頭の上から、低くて優しい声が聞こえる。よく知っているその声に慌てて見上げると、彼がいた。

「約二十時間ぶり？ 連絡してって言ったのに、どうして君はまっすぐ帰ろうとしてるのかな？」

「お、音成、さん？」

動揺して上ずった声を出す星南を見つめながら、彼は綺麗な目を細める。

「約束破る子、俺、嫌いだなあ」

今日の彼は、これまでのような明らかな変装をしていない。

眼鏡だけをかけて、スタイリッシュな黒のスーツを着ている。どんな恰好をしているてもカッコいいけれど、今日の彼はまるで超エリート美形会社員のようだ。

「どうして連絡してこない？」

「そ、その……やっぱり夢かと思って」

「俺、嘘はつかないよ？」

軽く首を傾げた彼は、いつもの笑顔を星南に向けた。

「まあ、会えて良かったってことにしよう。君が出てくるのを、今か今かと待ってたんだ。お

いで」

自然と手を握られ引つ張られる。

「え、でも……あの……」

「素直に来てくれると助かるな。プライベートを、撮られたくない」

それは彼にとつてマイナスだ。一瞬で、ファン心理が働いた星奈は素直に頷いた。彼は満足そうに口元だけで微笑み、星南の手を引いてゆっくり歩く。

しばらくして駐車場に着くと、彼は慣れた仕事で車のキーを操作する。すぐにライトが点滅した車は白い普通の国産車で、よく見かける人気車種だった。

会社から駐車場が少し離れていたことから、星南は彼を窺いながら問いかける。

「外、寒かったでしょう？ ずっと、待っていてくれたんですか？」

「ああ。けど、ビルの中に入ってるカフエショップにいたから大丈夫だよ」

「そう、ですか……あの、バレませんでした？」

つい頭に浮かんだ疑問を聞いてしまう。

「だってみんなスマホ見てるでしょ？ 中には目ざとい客もいたけど、今日は眼鏡にスーツだし、無視してたら普通に去っていったよ。そっくりさんだと思っただんじゃない？ 意外とバレないものなんだよ」

さつきはバレたくないみたいなこと言っていたのに、矛盾してる。そう思いながら彼が開けてく

れた車の助手席まで行くけれど、やっぱり思うところがあつて見上げる。

「さつきはプライベートを撮られたくない、つて言っていました」

「男女で言い合つてたら目立つでしょ？ 普通にしたら一般人に紛れることもできるけど、明らかに目立つようなやり取りには、興味なくても人は注目するからね。外で誰か一人に気付かれたら、完全にアウトだ」

彼は超有名芸能人で、人気イケメン俳優の音成怜思だ。

彼の言う通り、こんなところで騒ぎになつて彼を困らせたくはない。そう考えた星南は、おとなしく車に乗った。

すぐに運転席に回つた彼は、さつと車に乗り込みシートベルトをつけて車を発進させる。

「引いてない？」

そう言つた怜思は、ハンドルを操作して右に曲がつた。

「引く？」

「そう。俺の物言いか性格とか。君の知っている俺とは結構イメージが違うでしょ」

星南は首を傾げた。よくわからないのが本音、というか。

たまにバラエティー番組に番組で出ている時の話し方は、今とそう変わらないように思う。

それに、彼は俳優だ。これまで数えきれないくらいたくさん役をやつてきている。それこそ、人をバンバン殺す殺し屋から爽やかな好青年まで。

だから別に、その時々で物言いや人格が違ってても、不思議とは思わない。

「私は、そんなに違うとは感じませんでしたけど」

「へえ……君、変わってるね。大抵、実際の俺はイメージと違うって言われるのに」

「……そうなんですか？ でも、それが本当の音成さんなら、いいんじゃないでしょうか？ 俳優さんなら、いろんな顔を持っていて当然なわけだし……」

上手く返事ができていないかもしれない。でも、イメージに囚われて相手を決めつけるよりはいいと思う。

「そうか、ありがとう」

彼の口元に笑みが浮かんだのが見えた。外が暗いので、はっきりしないけれど、どうやら彼は満足そうに微笑んでいるらしい。

「今日はね、初デートだし、ちょっとカッコつけてフレンチレストランの個室にしたよ。フレンチ、大丈夫？」

そんなお洒落な所に、と目を見開く。フォークとナイフを上手く使えなかったらどうしよう。内心ちよつと不安に思いながら、小さく頷いた。

「大丈夫、です。ありがとうございます」

「味は保証するよ。何度か行ったことのある場所なんだ。こうしてプライベートで行くのは初めてだけだね」

彼の口調はどこことなくふわりと流れるように優しい気がする。だからだろうか……はつきりものを言われても、敵しく感じないのは。

「撮影のあとそのまま来たからスーツだけど、今から行くところはドレスコードのないカジュアルな店だから。緊張しなくても大丈夫だよ」

撮影と聞いて、思わずファンの血が騒いでしまう。

「あ、あの……今は何の撮影をしているんですか？」

「はは！ それ聞いちゃう？ 来年公開の映画だから、内緒」

しー、と言うように唇に人差し指を当てる仕草が素敵だった。彼は何をしても絵になるので、ついつい目を奪われてしまう。

「来年公開の映画……まだ予告されてませんよね？」

「そう。さすがだね。そういうところも、ちゃんとチェックしてくれてるんだ」

「もちろんです。筋金入りのファンですから」

これは素直な言葉。星南は、音成怜思オタクと言っても過言ではない。

「わかってるよ。いくら俺の熱烈なファンでも、なかなか誰が見ているかわからない中、看板にキスなんかしないからね」

星南はカーツと顔が熱くなるのを感じた。

あれを本人に見られていたと思うと、恥ずかしくて堪らない。穴があつたら入りたいほどだ。

「すみません……」

「なんで？ 嬉しかったよ。むしろ、グツときたなあ。俺好みの女の子が、そんなことしてくれてたんだから、ホント堪らない」

「好みって、そんな……私はただの一般人で、普通のOLですよ？」

「好みの女の子が、一般人じゃいけないの？」

「楽しそうに話す、耳に心地いい声。」

彼はこんな話し方もするんだ。それを隣で独占できる自分に、ちょっと優越感を覚える。

何万、何十万、というだろう音成怜思のファン。その中の一人でしかない星南に、こんな夢みたいなことが起きるなんて奇跡だ。でも……

だからこそ、やっぱりありえないと思ってしまう。

「こ、これまで音成さんと噂のあった女の人は、みんなすごく綺麗な方でしたし……」

「はは、そうだね」

彼はハンドルを操作しながら、住宅街のちよつと奥まったところにある、洋館風の建物の前に車を停めた。きっとここが目的のフレンチレストランなのだろう。

「まあ、そういうつまらないことはさておき、だね」

シートベルトを外した怜思は、運転席に座ったまま星南をじつと見る。

「今は、目の前の君とのデートを楽しみたいな」

星南の頬を人差し指で軽く突きながら言った。

「もう一度聞くけど、好みの女の子が一般人じゃいけない？」

「……いいえ、そんなことは、ない、です」

「よかった。こう見えて俺、結構真面目な男だよ」

不真面目なんて思っていないから、星南は首を縦に振った。

「本当に、片思いつてストーキングと同じだ。気になって目で追って、想像して。……俺が何度、君に会うためにあの看板の前まで行ったと思う？」

怜思は星南の頬を指で突いたあと、そこを手の甲で撫でた。

初めて男の人からそんな風に触れられて、心臓がありえないくらいドキドキしている。

「これでも決死の覚悟で、君に声をかけたんだよ」

そう言つて小さく息を吐いた怜思は、なんだか息が苦しそうに見えた。

「息苦しい、ですか？」

星南の言葉に、彼は可笑しそうに笑つて首を横に振った。

「違うよ。星南ちゃん、手を借りるよ？」

彼に右手を取られた瞬間、心臓が破裂しそうに高鳴る。テンパった頭で、もう絶対にこの手は洗わない！ なんて考えていたら、手を彼の左胸に押し当てられた。

手のひらから直に伝わる少し速い振動に、星南は息を呑む。

「ドキドキしているのがわかる？ これくらい、俺は君と一緒にいて、ハイテンションになっている」

顔に血が集まって、唇が震えた。

「君のことは、まだ名前と連絡先しか知らないけど、誰よりも愛せる自信があるよ」

人気美形実力派、世界的俳優の音成怜思が、会ったばかりの星南のような女に、「愛せる」と言った!?

こんなこと、夢でない限り絶対に起こらないことだ。

そんな現実には直面し、星南は本当にどうしようと思うのだった。

3

——音成怜思のキャリアは二十歳の頃、空港でスカウトされたところから始まった。

怜思は大学のあったイギリスから帰国し、久しぶりの日本の空気を吸い込んだ。この人口密度の高さは好きではないが、自分はやはり日本人なのだと実感する。この国の空気が心地いと思うからだ。

怜思は、受け取った荷物についているタグを外してゴミ箱に放り込んだ。そのまま空港の出口へ

向かって、速足で歩く。バスが出るまであと五分しかない。

「待ちなさい！ ちょっと、待って」

どこからかそんな大声が聞こえてきたが、怜思は腕時計の時間を見ながら足を速める。

そこでまた、待ちなさい、と背後から声が聞こえた。それが、自分に言われている言葉とはちっとも思わなかった。

だから、いきなり後ろからセーターの裾を強く引っ張られた時、イラッとした。

「捕まえた、イイ男……あなた、名前は？」

「セーターが伸びるので、手を離してくださいませるか？」

相手は、見る限り結構年上だ。オバサンと言っても過言ではない年齢の人が、息を切らして怜思のセーターを掴んでいる。

緩くカールを巻いたロングヘア。化粧は濃いけど、顔立ちはそこそこ整っている。上を向いた濃い睫毛も、天然のようでフサフサと揺れている。服装は、若干若作り。似合っているが、怜思の好みではなかった。

「ああ、ごめんなさい。で？ あなた名前は？」

セーターから手を離してくれたのはありがたいが、見ず知らずの相手に名乗る義務はない、と怜思は判断した。

「知らない人に名前を教えちゃいけませんっていうのが、家訓なので」

そうやって踵を返したら、今度は腕を掴まれる。女にははやけに強い力で、怜思は眉間に皺を寄せて振り返った。どうやら面倒なのに絡まれてしまったようだ。

「離してください」

「いやよ！ 名刺渡すからちよつと待って！ ほら、私は佐久間美穂子！ こう見えても、芸能事務所の社長なのよ、ほら！」

彼女に無理やり手渡された名刺には、確かに社長と書いてあった。しかし、社長を自称する人間なんてどこにでもいる。

怜思はそういう手合いを相手にできるような法律の勉強を散々イギリスでしてきたので、彼女に名刺を突っ返した。

「佐久間芸能プロダクション？ そのまんまで、明らかに胡散臭い。すみませんが、興味ありませんので」

それじゃ、と再び踵を返そうとすると、さらに強い力で腕を掴まれた。

「だーっ！ ダメ！ 行かないで！ お願いします！ お願い！ あなたみたいなイイ男、きつともう二度と巡り会えない！ ウチは真つ当な芸能プロダクションで、胡散臭くなんてないわ！ 最近売れっ子の相川祐樹って知ってる？ あれウチの所属の子よ」

「知りません。俺、ずっとイギリスにいたので」

きっぱりと答えた。怜思は父の仕事の都合で、十六歳から二十歳の今までイギリスで過ごした。

この四年間の芸能界事情など知るはずがない。

「すみません、バスの時間があるので急いでいるんです。離してください」

腕時計を見ると、あと一分でバスが発券してしまう。もう、諦めるしかないだろうと内心舌打ちしたくなる。

「いや、無理！ ここで離れたら私が後悔する！ 本当の本当に、胡散臭くないの！ ねえ、あなたいくつ？ ずっとイギリスにいたってことは、帰国子女？」

まるでお構いなしに質問を繰り返す彼女に、怜思の眉間の皺は深くなる一方だ。

佐久間芸能プロダクション社長の佐久間美穂子は、怜思の手を取り再び名刺を渡してくる。

「見知らぬ人に、年齢を教えるほど馬鹿じゃありません」

「だから本当に、ウチは真つ当な会社なの！ まだ小さい会社だけど、私自身モデル出身だから所属の子は大切にしているのよ」

言われてみれば確かに目の前のオバサンは、綺麗な顔をしている。身に着けているものや持っているスーツケースは有名なブランドのものだし、パンプスも服も控えめだがセンスがよかった。

しかし、だからと言って怜思の情報を教える理由にはならない。

「俺、次のバスには乗りたいので、失礼したいんですけど……オバサン」

もう一度名刺を突っ返す。彼女はオバサンと言われたことがショックだったようで、目を見開き言葉を失っている。ここまで言ったのだから、いい加減諦めるだろう。

芸能プロダクションなんて冗談じゃないと心から思う。

実のところ、怜思の家は芸能一家と言っても過言ではなかった。

父は有名なバイオリニストで、テレビに出ることも多い。今回、日本のテレビ局の仕事があると
言って、怜思より早く日本に帰ってきていた。

すでに亡くなった母も有名なピアニストで、おそらく今でも名前を知っている人はいるだろう。
さらに妹は、十八歳ながらすでにピアニストとして頭角を現し、最近有名な国際コンクールで一
位になったばかりだ。

怜思も一応、三歳から十八歳まで楽器をやっていたが、あまり音楽的な才能はなかったらしい。
それなりにピアノやバイオリンを弾くことはできるけど、それだけだ。

さほど真剣に打ち込みたいと思ったこともないし、有名な音楽家の息子だからって、音楽家を目
指す必要はないと思っている。

どちらかというと勉強の方が好きだし、大学を卒業した今は日本で弁護士を目指そうと思って
いた。だから、芸能界にはまるで興味が無い。むしろ、父母や妹を見てきたから、大変な世界だと
思っていた。

だが、オバサン——美穂子は一向に怜思の腕を離してくれない。

「よく考えて。あなたこれだけイイ男だったら、即有名名人よ？ イギリスでもモテモテだったん
じゃないの？ あなた、たぶん身長百八十五センチは軽く超えてるでしょ？ 雰囲気も日本人らし

くないし、どこか外国の血が入っているわね？」

怜思は微かに目を見開く。思いのほか、人のことをよく見ていると思った。

言わないと気付かれないが、怜思の両親はどちらもクォーターというやつだ。母方の曾祖父はイ
ギリス人で、父方の曾祖母はフランス人だった。だがクォーター同士の子どもの外見は、ほぼ日本
人と変わらないのに。

「なんでわかったの？」

「そりゃあ、それだけ顔が整っていて美しければね。それに、全体的に大きな目の形もそうだし、
腰の高さとその体格、身長のことを考えたらおのずとそう思ったわけ」

もしかしたら、この人の言っていることは本当なのかもしれないと思っただ。でも、芸能には心の
底から興味が無いし、自分にはそういう才能がないのを十分理解していた。

「とりあえず、私の話を聞いてくれるまで離さないから！ 何なら私が家まで送ってあげるわ」

「かなり迷惑ですけど。だいたい、家についてきて何するんですか？ あんまりしつこいと、警察
呼びますけど？」

「呼ぶといいわ。それで私の身元がはっきりするなら願ったり叶ったりよ。そうしたら、あなた
のご両親に会って挨拶をして、私の話を聞いてもらおうわ！」

美穂子はこれっぽっちも引き下らない。

「父はオーストリア在住。母は去年事故で他界しました。ちなみに家に来て、家政婦しかいませ

んけれど」

怜思は嘘をついた。確かに父はオーストリアに拠点を移し、妹もそこにいるが、今は二人とも日本に帰ってきている。きつと、久しぶりに会った怜思に激烈ハグをかますことだろう。

「来たところでああなたの話は聞いてもらえません。なので、手を離してくださいませんか？」

この人と関わったら大変だ、というのが怜思の結論だ。

「嫌よ、絶対に嫌！ お願ひ、お願ひします。私に話をさせてください！」

そして彼女は、ようやく怜思から手を離したと思ったら、床に膝をついた。

「お願ひ！」

いきなり目の前で土下座をされて、今度は怜思の方が焦った。急いで、膝をついて頭を下げている彼女の手を引っ張る。

「ちょっと、恥ずかしいからやめてください」

「話を聞いてくれるまで、ずっとこうしてるから！」

本当にクソ面倒くさいと思いつながら、怜思は眼鏡を押し上げた。何を言ったところで、この人は絶対に引いてくれないだろう。

はあー、と大きなため息が出た。こんな人と関わりたくないが、とりあえず今は仕方がない。

「……わかりましたよ」

がばつと顔を上げた美穂子の表情がパアツと明るくなった。その顔は確かに綺麗だったが、正直、

迷惑以外の何物でもない。

「話を聞くだけですよ？」

「もちろんよ！ あなた、名前は？」

「音成怜思」

「いくつ？」

立ち上がりつつ、さつそくとばかりに次々と質問が飛んでくる。

「二十歳です」

「大学生なのね。学校はイギリス？」

「卒業しました」

「え？」

美穂子が驚くのも当然だろう。二十歳なら普通にまだ大学へ通っている年齢だ。

「俺、スキップして今年大学を卒業したんです。さつき嘘をつきましたけど、父は今、日本にいます。あなたも知っているんじゃないですか？ バイオリニストの音成怜思」

美穂子は目を見開いて、口をほかんと開けた。その間抜けな表情に怜思の溜飲がちょっとだけ下がった。彼女はすぐに我に返り、大きく頷いた。

「だったら話が早いわ。ぜひとも今日中に、お父様に会わせていただけないかしら。あなた、他にやりたいことがあるかもしれないけど、やっぱり芸能人になるべきよ。私は今、百年に一度の金の

卵を発見した気分だわ！」

美穂子の顔色が変わったことに、怜思はすぐに気が付いた。

ああ、親の七光りを利用しようとするやつか。軽蔑も露わに、舌打ちをした。

「悪いけど、俺は音楽家には向いていない。父の名前を使うくらいなら、ここでさよならしてくださう」

「はあ？ 私はあなた自身の魅力を売りにしたいと言っているのよ！ モデルから俳優なんてどうかしら？ 親の名前なんかなくても、あなたは絶対に光るわ。私が保証する」

この時、怜思は何を思ったのか、なんだかよくわからない自信を漲らせるオバサンを信じた。

彼女は気前よくタクシーで怜思の家に向かった。そして、迎えに現れた父に笑顔で挨拶する。父の方が美穂子を知っていたのに驚いた。

———そうして十二年。

怜思は三十二歳となり、当初の予定とはまったく違った方向に、彼の人生は動いていたのだった。

* * *

芸能人として活動を始めた怜思は、あつという間にスターの道を駆け上がった。それこそ、美穂子が予想した以上の華々しいキャリアを積み上げている。

CMランキングでは常に上位をキープしており、テレビで見かけない日はない。ファッション誌の表紙を飾ることも多く、特集が載った雑誌は完売することもあった。事務所の判断で連続ドラマに出演することは無いが、スペシャルドラマや映画は軒並み好評。

現在はCM契約数が十三本、専属モデルをしているブランドは二社。スペシャルドラマの番宣でテレビ出演が五本予定されている。その他、雑誌の表紙撮影が三本と、ラジオ出演。怜思が出演したとあるアーティストのミュージックビデオの反響がものすごく、CDがかなり売れたと聞いている。さらに、最近出演した二本の海外映画がどちらもヒットして、世界的俳優という肩書きまでつくようになった。

それがあるがたいと思う反面、プライベートはないに等しいくらい仕事に忙殺されている。

とにかく毎日があつという間にスケジュールで埋まる。もちろんオフもあるが、友達と会う暇もなかなか取れない。

ドラマの撮影を終え、今日はもう帰るだけだ。怜思はため息をつきながら車窓から外を見る。ひととき目立つ看板が目に入った。最近撮ったブランドモデルの看板で、恰好をつけた自分がこちらを見ている。紛れもなく自分なのだが、自分ではないように感じた。

「向井さん、俺が芸能界引退するって言ったたら、美穂子さん怒ると思う？」

ぼつりと、運転席のマネージャーに声をかけた。

「ええっ!？」

向井尚子という怜思のマネージャーは、素つ頓狂な声を上げて後部座席の怜思を振り返った。

「運転中。前見て」

「あ、はい……ごめん」

向井は慌てて前を向く。バックミラーに映る彼女の顔はかなり焦っているようだ。

「冗談でしょ？ 怜思」

「半分冗談、半分は本気、かな」

「なんで急にそんなこと言い出すわけ？ 今日の取材、嫌だった？」

ドラマ撮影の前に入っていた取材内容を思い出す。この間出演したミュージックビデオについて始まり、日々の過ごし方を聞かれた。そこからさらに恋愛観に発展して、内心ため息をつきながら笑顔で当たり障りのないことを答えた。

付き合っている人はいる。でも、会えばただ身体を重ねるだけで、たぶん恋愛とは言えないだろう。

本当は心で感じるような恋がしたい。心が震えるほど相手を好きだと感じたい。

でも今は、恋愛も仕事の延長線みたいなものでしかない。

怜思は黙って窓に肘をつき、ぼんやりと外を見る。スモーク加工されたガラスは、外から中が見えないようになっていいる。同時に、車中から見る街の色は本来の色がわからないのだ。

直接色を捉えられないのは、自分がこの道を選んだから。

街中を自由に歩いたのは一体どれくらい前だろう。都心だけあって、夜でも窓の外にはたくさん人がいる。その中に、怜思の知り合いはおそらく一人もいないだろう。

だが、怜思を知らない人は、ほとんどいない。

ファッションビルの壁面に大きなスクリーン。そこに、自分の出ているCMが流れる。

今売れているカメラのCMで、砂漠と緑豊かな密林で行われた撮影には一週間も費やした。しばらく飛行機には乗りたくないと思うくらいの移動距離に、辟易したのを覚えている。

それでもこうしてCMの出来上がりを見ると、この仕事をやって良かったと思う。

ただ時々、自分はいつまでこの仕事を続けるのかと考えてしまうことがあるのだ。

自由に街中を歩くこともできず、友達は芸能人がほとんど。好きな店で酒を飲むこともできないし、好きな子ができて気軽にデートに誘うこともできない。

この十二年の間、付き合った人は全員芸能人。美人で大人で割り切った相手だから、キスもセックスも楽しかったけれど、結局はそれだけだ。たまに綺麗な身体を揺さぶりながら、自分は一体何をやっているのだろうと思ってしまう。

こういう不健全な付き合いしかしてこなかったから、真実の愛なんでもに憧れを抱くようになるのだろう。

「ふと思っただけ。たださ、さっきの取材で、音成さんにとつての恋愛とは何ですか？ つて聞かれて、あったらいいけど、なくても死なないものって答えた。けど……考えたら、まともな恋愛な

んで、芸能界に入ってからしてないな、と」

「……怜思、どうしちゃったの？」

モデルとしてデビューした頃は考えたこともなかったが、自分や周囲の予想に反してトップスピードで売れ始めてしまった。大した覚悟もないまま、いつしか怜思のプライベートは怜思の自由ではなくなった。

「今の相手は？ 彼女とは結構長く続いているじゃない？」

今の相手、というのは現在恋人のような関係を保っている女性のことだ。最近、彼女とは冷めてきているから、怜思が一言別れると言えはすぐにこの関係も終わるだろう。

「とりあえず引退の話は置いて、彼女のマンションの近くで降ろせばいい？」

「ああ。行ったところで、ただセックスするだけだけどね」

それすらも面倒くさく感じて、つい投げやりに答えてしまう。

「……怜思。いい加減、本気の恋を見つけないよ」

「はっ、こんな嘘ばつかりの場所、どうやって？」

思わず苦笑すると、向井はそれ以上何も言わなかった。

車が信号で止まると、ビルのスクリーンに自分の出ているCMが流れるのが目に入った。カメラを持った自分の顔が大画面に映し出される。

こんなものばかり流すから、自分は健全でいらなくなるんだ、とぼんやり思った。

芸能人として生きていて仕事がたくさんある。それこそオファーを断るほどに。それはすぐくありがたいことだ。仕事は楽しいし、やりがいもある。もっと新境地を開きたいと思うことも多い。でも、時々、どうでもよくなる時があった。

音成怜思という存在に背を向けたくなるような、冷たい気持ち湧き上がってくる。

ふと視線を移すと、大きなビルの壁面を占領する自分が目に入る。先ほどとは別のファッショブランドの看板だ。確かに目を引くが、このブランドはあまり好きではなかったことを思い出す。

初めて見る看板の出来をじっと確認していると、一人の女性がその前に立ち止まった。何気なく見ていたら、女性はそつと看板の怜思の頬に手を添える。

「手、小さいな」

小さくつぶやく。すると彼女は、そのまま冷たい怜思の頬にキスをした。

「へえ……彼女も俺のファンか」

ありがたいことに、ファンは大勢いる。でも、なぜかわからないけど、彼女が看板にキスをする姿がやけに新鮮に映った。

ビルのスクリーンに、また自分のCMが流れ始める。ついため息をつくとき、看板にキスをしている彼女が振り返ってビルのスクリーンを見上げた。

「……あ」

「ん？ どうしたの、怜思？」